

きらきらと橙色のひかりの破片が目突き刺さった。高校に入ってからはじめた、バイトがない日の習慣であるランニングの途中。家から神社まで行き、階段を折り返して家の前を過ぎ、公園を経由してからその先のスーパーで夕飯の買い物をして家に帰る。

シングルマザーである母に負担を掛けたくないために運動部には所属できない。雀の泪ほどではあるが、資金的な援助のためにその分できるだけバイトを入れたい。けれどそれでは運動不足になりがちだ。そしてまた、できるだけ家のことを手伝いたい。

運動もできて買いたい物もできる、そんなふうにとでも理に適ったいつものコースを六割ほど消化したところだった。民家の塀沿いに道を折れて、そこから公園に向かうとしていた。

直に見つめてしまった太陽はいくら沈みかけといえど眩しく、ひかりが突き刺さる微弱な痛みで反射的に目を細めた。

それがいけなかった。すでに一キ口ほどを走った躰はほどよくあたたまりはじめていて、高鳴った心臓と体温はさらなる熱を求めていた。

それもいけなかった。

意識はすっかり走ることに集中しだしていた。

おそらく、それも。

「……っ、」

躰に衝撃がはしり、次いで何かがアスファルトに倒れこむ音と、息をのむ音が聞こえた。

何かが、転倒した。

でも、それはぼくじゃない。ぼくの息はあがっているものつまってはいないし、地面と視線はいつもの高低差をたもっている。

「うわ、ごめん、」

一瞬の間を置いて覚醒した視界に、地面にしりもちをついている少年が飛び込んだ。呼び掛けて駆け寄った。うつむいた少年はちいさい。小学校の低学年くらいだろうか。夕日をゆるく反射する柔らかそうな淡い色の髪に、なぜか妙な既視感を覚えながら薄でのコートに包まれた背中をさすった。安否を確認しながら、立ち上がらせようと手をのべる。

「怪我は、」

「へいき。」

ぼくの手をおしのけて、立ち上がる。てのひらを怪我してしまっただのか、拳を握ると頬がひきつる。

「いたくないから。」

す、と、細い顎が持ち上がる。つんとそらされた顔は、年不相応のひどく冷めたおももちを浮かべている。色素のうすい作りの躰は、全体がほんのりと橙にそまる。影が射した彼の顔立ちを見て、ぼくはつまってはいなかつ